

Alison Wray (2002) *Formulaic Language and the Lexicon*,
Cambridge University Press.

伊藤克敏

最近、言語習得研究を中心に、いわゆる「定型表現」と言われる言語単位の研究が注目を集めている。本書は、母語、第二言語習得それに言語喪失の観点から、定型表現と語彙の問題を論じている。

第1、2章では定型表現の性格について論じている。定型表現は言語の周辺部分で、言語処理に中心的に関わるものではない、とするPinker(1994)の説に異を唱え、言語の実際的な使用や言語機能の研究においては極めて重要な言語単位であるとしている。そして、抽象的な文法構造と全体的な単位として記憶されている定型表現との二体系性で言語は捉えられるべきであるとし、前者は左脳、後者は右脳で処理されるものであるとする。定型表現は伝達場面に直結しており、語用論の研究と深く関わっている、としている。

第3章では母語習得における定型表現の役割について論じている。Brown(1973)やPeters(1983)の研究を踏まえ、幼児は一般的に、ことばを場面との関係で「未分析の全体」として捉え、徐々に、分析し、言語体系を構築していく。しかし、個人によって全体的・分析的習得方略の違いがある

(Peters, 1983)という研究も紹介している。

第4章では定型表現の第2言語習得における役割について触れている。児童の第2言語習得では母語習得と同じように、遊びなど実生活で多用される決まり文句的表現を先ず習得し、分析的方略に移行して行く。しかし、大人は定型表現に頼る期間は比較的短い、としている。

第5章では失語症と定型表現の関係を論じている。左脳の機能を喪失した患者は特に感情的表現とか音調は保持しており、右脳の機能を喪失した患者は比喩表現とかユーモアの理解が困難で、場面に適切な言語使用ができない、としている。

第6章では、Heteromorphic Distributed Lexicon (HDL)という統合モデルを提示している。分析的な語句から全体的な固定表現まで4つの段階に分類し、このモデルをLamb(1998)、Langacker(1987,1991)の理論やPattern Grammar (Hunston & Francis 2000)との関連で論じている。そして、HDLは分析的、全体的言語処理、規則性、不規則性を包括的に扱うことが出来、言語の分析的な面しか扱えないチョムスキーの言語理論より優れているとしている。